国際政治経済論研究Ⅰ・Ⅱ（シラバス詳細）

下川雅嗣
m-shimok@shophia.ac.jp
http://pweb.sophia.ac.jp/~m-shimok/

［授業の目的・内容・進め方・履修上の条件等］

国際政治経済論研究Ⅰ・Ⅱを併せて通年のゼミとして取り扱うので連続受講が原則。国際政治経済諸問題をより深く理解する能力を育てる。その際経済学的な分析方法を重視し、何らかの点で貧困に関わる問題を中心に取り扱いたい。前期は共通の文献を読んで討論する予定だが最終的には授業の参加者と相談の上決定する。経済学の基礎的知識があることが望ましいが、そうでない場合、学部開講の国際経済学Ⅰ,Ⅱまたは国際政治経済論Ⅰ,Ⅱを併せて受講することが勧められる。（履修要覧記載）

※補足：共通文献購読の合間に、各自の研究テーマを持っている人（2 年生以上が中心）の発表（途中経過も含めて）を随時入れていく。特に後期は研究報告が優先されるであろう。

［評価方法］

ゼミでの割当の発表、毎回の参加の度合い及び発言内容等で総合的に評価する予定。

※補足：後期は、これにゼミ論または修士論文の内容も加味される。

［共通文献購読について］

＜目的＞

貧困問題を中心として国際政治経済諸問題をより深く理解する能力を育てる。そのためここでは、まず貧困に関わる経済学的な扱い全般について理解を深めると同時に、特に経済学的な分析方法を重視し、特にモデル分析的な方法、発想に慣れることをも目指す。また後半は、純粋に経済学的な領域を超えて、私たち（所謂先進国で高等教育を受けた人間）が貧困と関わる際のあり方についても考え、真の貧困解消のあり方を考えてみたい。

＜やり方＞

・原則として参加者全員はその回の予定分を読んでおく。毎回のクラスでは担当者はレジメを用意した上で 45 分以内で要点をプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションは、論述的な部分は自分が重要だと思う点だけでよいので、必要に応じてテキストの図や表の説明をしながら必ず 45 分以内におさえること。モデルについては、モデルのメカニズムがわかるように必要に応じて図を板書しながら説明すること（出来る限り数式を使わずに）。この場合は難しいモデルの場合は時間がかかる可能性もあるので、45 分を超えても仕方がない。なおモデルと論述の部分が混ざっている場合は、モデルを中心に説明すること（論述的な部分は読めばわかるので）。なお、後半の 45 分は、担当者以外がわからないことを担当者に質問し、担当者は責任を持って答えること（そのため担当者はきちんと準備しておくことが要求される）。担当者が回答できない場合は、別な参加者で答えることができる

人が答えること（その場合評価アップ）。誰もわからない場合は私が答えるが、多分そのような難しいものは私もその場では答えられないだろうから次週への私及びその回の担当者の宿題となる（第 2 章の進み具合の結果方針を根本的にかえる可能性はあるが、原則として一回分で終わらない場合もあとは各自で読み込むということにして、先に進む予定に挑戦してみる）。モデルが誰もわからない等次週への繰越がある場合は、次週は 1 時からはじめて最初の 30 分で解説を行う。

・昨年の本とちがって、本書はテキストなので、議論する余地はあまりなく、各自がきちんと準備しておけば、疑問点は少ないはずなので、私の解説はさほど多くならないと思われる。

＜内容（案）＞

主要テキスト:Ray, D. (1998), *Development Economics,* Princeton University Press

※難易度（多分）：★簡単　★★少々難　★★★かなり難

※本書に含まれるモデルについて一応ピックアップしてみたが、まだきちんと読んだ訳ではないので、正確でない場合もある。下川の方でわかり次第お伝えするが、そうでない場合担当者が実際に読んで判断すること。

※各章でのさらに詳しい参考文献は、Ray にあるので、関心のある人はそれを読むこと。

1）貧困問題(経済発展論)概観：1 回（場合によっては 2 人で）

×Ch.1（各自で）

➔Ch.2 Economic Development: overview, pp7-44　★

（モデルなし）

※GNP,GDP について全く知らない人がいれば下記のいずれかを読んでおくこと。

→スティグリッツ（2001）、『マクロ経済学（第二版）』（藪下、秋山他翻訳）東洋経済新報社、pp61-102。

→浅子他（1993）、『マクロ経済学』新世社、pp5-15

＜経済学における一般的経済成長理論＞Ch.4,5 を順番としてはやりたいところだが、理論的に少々難しいので最初から嫌気をさされても困るので後に回します。このため＜歴史と期待の役割＞Ch.5 も後に回すことになりますが、歴史認識については下記のとおり早めに考えておいた方がよいでしょう。

2）所得不平等：3 回（①Ch.6、②Ch7:197-217、③Ch7:218-241）

➔Ch.6 Economic Inequality, pp169-193★

・ローレンツ曲線とジニ係数の説明はきちんと行うこと。

※参考：日本語でより詳細に知りたいとき

→アマルティア・セン著（鈴村・須賀訳）（2000）、『不平等の経済学』（特に 2 章）東洋経済新報社。

→鈴村興太郎・後藤玲子（2002)、『アマルティア・セン：経済学と倫理学』（第 3 章：不平等の経済学と倫理学）実教出版。

➔Ch.7 Inequality and Development: Interconnections, pp197-241★★

→241-247 はパス

・グズネッツの逆 U 字。

・逆 U 字のテスト（少し難しい？）

・Fig 7.5

・Occupational Choice and the Credit Constraint と Wealth distributions and equilibrium の中にそれぞれモデルがありそうだけど。。

※参考：回帰分析や t 値等がわからない人

→Appendix2(pp778-804)。この Appendix が難しく、日本語で簡単なイントロ的解説の欲しい人は下記の本。

→ロウントリー, D. 著（加納悟訳）(2001)、『新・涙なしの統計学』（特に pp198-212）新世社。なお、この本は統計に関する最も簡単な入門書なので関心のある方は全部読んでおくように。

3）貧困：1回

➔Ch.8 Poverty and Undernutrition, pp249-290★

→長いけど概論的なのでさっと。

×Ch.9 Population Growth and Economic Development, pp295-340

※関心のある人は読んでおくように。

4）農村都市間労働移動：3 回（①345-347,353-372、②372-398、③前ののこり＋下川？）

➔Ch.10 Rural and Urban, pp345-347,353-398★★

→348-352 はパス（各自で）

・Lewis Model

・Lewis-Ranis-Fei Model

・Harris-Todaro Model

・Harris-Todaro の応用及び拡張

➔下川（1998)、「都市インフォーマルセクターでの事業機会と農村都市間労働移動―フィリピン経済のケーススタディー」『アジア経済』、39(6)、pp23-42.★★

5）国際貿易理論（基礎）：1回

➔Ch.16 International Trade, pp622-644★（★★）

※講義の内容とほとんど一緒だが、表現の仕方が違うのでこの説明にも慣れてもらう。

・リカードモデル（比較優位）

・ヘクシャー・オリーンの契約曲線を使った表現

6）貿易政策：３回（①Ch17:647－676、②Ch17:676－705、③Ch.18）

➔Ch.17 Trade Policy, pp648-705★★

・Import Substitution の説明、為替レートへの影響、不完全情報の際、動学的利益

・Export Promotion の説明

※構造調整プログラムや IMF,WB については以下の本も参考にした方が良い。

→Stiglitz (2002), Globalization and its Discontents (Ch.3,4 のみで十分か), ALLEN LANE(翻訳：『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』徳間書店：ただし表題のつけ方及び翻訳はかなりひどい)。

➔Ch.18 Multilateral Approaches to Trade Policy, p711-754★（一部★★）

・Coordination Game

・Trading Block はモデルか？

*******以下変更の可能性高（またいずれにしろ後期でしょう）******************

<A 案>発展途上国（？）の市場が不完全性に注目した議論を中心に

×Ch.11 Markets in Agriculture: An Introduction, pp403-414(ざっとやるか各自読む)

×Ch.12 Land, pp415-481（関心のある人は読むこと）

７A）労働市場：1 回

➔Ch.13 Labor, pp483-500★★

・悪栄養状態の均衡モデル（貧困の罠）

・上記モデルの市場均衡

→500－524 はパス

８A）クレジット市場：３回（①529-553、②561－586、③時間があまれば下川）

➔Ch14. Credit, pp529-586★★★

・Lender's Risk Hypothesis

・Default and Collateral

・Default と Credit Rationing

・Informational Asymmetries and Credit Rationing

・Interlinked Transaction model

➔下川（1999)、「インフォーマルセクター生産財市場の競争政策：小規模事業家の市場アクセスの改善」『アジア経済』、40(2)、pp2-18。★★★

➔下川（2001)、「インフォーマルセクターにおけるクレジット及び市場へのアクセスの改善：インターリンケージ取引の存在する場合」『アジア経済』、42(8)、pp27-52。★★★

×Ch.15 Insurance, pp592-617

＜B案＞現代のマクロ経済学の２つの中心テーマのうちの１つである経済成長論を中心に。

７B）経済学における一般的経済成長理論：３回（①Ch3.1, 3.2。②Ch3.4, 3.5。③Ch4）
➔ Ch.3 Economic Growth, pp47-84,88-90：★★
→84-94 はパス。
・Harrod-Domar Model（数式の説明もすること）
・Endogeneity of Population Growth（図で説明）
・Solow Model（図と数式で説明）
・Technical Progress（図：必要ならば数式）
※この箇所を難しく感じる人は、まず下記を読んでからのほうが良いかもしれない。
　→浅子他（1993)、『マクロ経済学』新世社、pp301-312
➔Ch.4 The New Growth Theories, pp99-107（余力があれば-116)、117-125：★★★
→107-116 はパス可。
・Human Capital Model
・A model of deliberate technical progress
・モデルではないが Total Factor Productivity の説明はきちんと行うこと。

８B）歴史と期待の役割（ただし狭い意味）：１回
➔Ch.5 History, Expectations, and Development, pp131-161★（一部★★）
・５つある Fig の説明をきちんと行うこと。
※近代経済学ではこのようなトピックスを扱うのは新しい。しかし、本当はもっと大きな歴史認識が必要（純粋な近代経済学において普通はこの部分が抜け落ちている)。これについて関心があれば、下記の文献が良いのでは。なおアンソレーナ氏のは学問的な記述ではない。
→峯陽一（1999）『現代アフリカと開発経済学』日本評論社、「第一章：歴史への視座」、pp3-30（余裕があれば全体を読んでもよい。歴史学の専門家でもある（近代）経済学者）
→アンソレーナ他（1992）『スラムの環境・開発・生活誌』明石書店、「第一章：南に広がるスラム（特に 2,3 節)」、pp22-48
→他に何か良い本知っている人がいたら教えて…

*******以下純粋な経済学の領域を超えて***************
９）民営化と貧困:１回
・民営化とアルゼンチンの貧困の論文あたりか。。（後日追記）
１０）貧困解消と国際機関の援助：１回

・後日追記

１１）貧困解消の際の発想の逆転：1 回

→Chambers, R. (1997), *Whose Reality Counts? Putting the First Last,* Intermediate Technology Publications. (Ch,1-3)

※関心がある人は残りは各自で。

※邦訳あり。だけど、、、『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』明石書店

１２）People's Process：１回

・後日追記